

聖日集会 聖書講筵

我 主を喜び

1992年7月26日（京都）

奥田 昌道

太初に祈りありき 歓喜のあぶら、讃美の衣 大いによるこび、わが神を楽しむ あさ日の光
輝、もゆる松火 御言という食物 ロゴス・キリスト 新たに生まれる 真を行つ者は光に來
る 十字架に現れし御愛 御霊の火で燃えよう！ 熱禱

●太初に祈りありき

大変暑くなりましたが、皆さんが主に護られてお元気で本当に感謝です。

さきほど、村岡兄から、もう一度原点に立ち返ろうというお話しがございました。『エン・クリスト』第51号に梅村兄が「二十歳の原点」ということを書いておられました（1992年7月夏季号「キリストの火でこのタドン今火になった！」）。本当にその気持です。

村岡兄、梅村兄は大学の同窓で、信仰の方ではどちらがどちらを導いたのかは知りませんが、どちらもエマオ会より来られました。青春時代の靈魂のさすらいというか、彷徨の中でのこの福音に出会って、しかもそれが路傍に播かれた種ではなくて、いろいろな妨げもありましたでしょうが、しっかりと実を結んでこられたということがどんなに大きな恵みかと思えます。一人の人の中にキリストの生命が植え付けられて成長していくということが、どんなに大きな出来事であるかと思えます。

人間はちっぽけな存在ですが、その小さな芥子種一粒という存在の中にキリストという御霊が宿りますと、それは大きな大木に育ちまして、そこに空の鳥が巣を張って宿るようになります。これはキリストの御業なのです。

人の目にはいかように見えましようとも、キリストは一人ひとりの人格においてそのような実を結ばしめ給います。一人の御霊の人の存在というものは本当に回りを照らし、神様の愛を証しするという大事な大事な役割があり、神の国の歴史においても、大きな役割を果たしている、と私は思うのです。私も36年前にもしキリストに出会っていなかったならばどうなっていただろうと、時々思うのです。

お話しのありました私の著作の仕事にしましても、あれは昭和49年から51年にかけて、夏の信濃追分に出版社の方が宿を借りてくねまして、そこを拠点として、何人かと共同生活をしたがら執筆をしました。私は毎朝、起きると直ちに山の麓——浅間山がずっと見えるのです。雄大な追分が原というところがあつて——そこへ走って行きまして、讃美歌を歌って聖書を読んで、祈って帰って来ました。それから、朝ご飯を食べて、昼間に仕事をして、



日暮れにまた、ランニングでそこへ行くということをしていました。朝は祈り、夕方はランニングという、生活のリズムというか、祈りのリズムで生活をしていました。確かに直接には御霊の知恵でどの文章を書いたといったようなことは無いのですが。

生活そのものを祈りをもって始め、祈りをもって貫くというふうに、常にコンスタントに弛みなく続けていくことは、本当にマラソンのようなものです。

そういう仕事をこつこつと積み重ねて行くことは、楽にやれる人もあるかも知れませんが、私などにとってはそう易しいことではないのです。それを継続させていただくことは、やはり、

「太初に言ありき、太初に祈りありき」

という生活で自分の生活を律していきませんと、著作の仕事はなかなかできなかったと思います。三夏を追分で過ぎ、最後の年は赤倉の方に移って、全般のことをやりました。赤倉でも同じような気持で生活をしていました。

私が若王子の山に行くのもそういう気持があります。山の中に入れば本当に一人なので。今朝も行きましたが、今は木が鬱蒼と茂って気味悪いくらいです。あのようところへ一人で行って変なことになったらいけませんから、女性の方には勧めませんが。蚊取線香を二つ持って行き、点しますと、木立なので風がぐるぐると回っているのです。木立に固まれている、そよ風が吹いてきて凄く涼しいのです。しかし、蚊が多く、始め自分の方に煙が来るように置いていたのに、もう次の何分か後には風の方向が変わっているのです。主さまも一人で祈られたことを思います。主は一人山に登られた、主は一人山に登って夜を徹して祈られた（ルカ6・13）とあります。そのような主のお姿には及びもつきませんが、やはり、そのようにして、一人で祈る時を持つというのは、大きな恵みだと思っています。我々、クリスチャンにとって、一人あるということは非常に大事なことです。我々は本当に、

「戸を閉じて、隠れたるに在す汝の父に祈れ」（マタイ6・6）

と、キリストの言葉にあります。なにも「戸を閉じて」と文字通りに部屋に閉じこもってということではなくて、自分一人の時間を持つということなのですね。

「自分一人の時間を持つて主さまと対話をしなさい」ということです。

● 歓喜のあぶら、讃美の衣

今日は村岡兄に大変に嬉しい司会をしていただきました。今日のイザヤ書とつながっているのです。今日は旧約聖書のイザヤ書第61章からです。1節から3節は主キリストを指し示す預言の言葉です。

「主エホバの霊われに臨めり。こはエホバわれに膏をそそぎて貧しきものに福音をのべ伝うることをゆだね、我をつかわして心の傷める者をいやし、



俘囚にゆるしをつげ、縛められたるものに解放をつげ、エホバのめぐみの年とわれらの神の刑罰の日とを告しめ、又すべて哀むものをなぐさめ、灰にかえ冠をたまいてシオンの中のかなしむ者にあたえ、悲哀にかえて歡喜のあぶらを与え、うれしいの心にかえて讚美の衣をあたえしめたもうなり。かれらは義の樹エホバの植えたもう者、その栄光をあらわす者となえられん。」
(イザヤ61・1～3)

これは主キリストの預言ですが、同時に主キリストの弟子たる私たちの使命についての預言として受けとりたい。主は去られるにあたつて、

「私はあなた方をこの世に遣わす」(ヨハネ17・18)

「あなたがたは私がしているより以上の業をなす」(ヨハネ14・12)

とおっしゃったのです。主キリストは基礎を造って下さり、道を開いて下さいました。その後、直接には使徒たちですが、その流れを受けまして、私たちがやはり同じようにその主の御業を引き継いでいかなければなりません。ですから、その意味では、イザヤ書第61章1節から3節は主キリストの預言であると共に、主から遣わされた者に対する預言でもあります。そういう気持ちで読んでいただきたいです。

大事なことは、

「主の御霊我に臨めり」

で、主の御霊が臨まなければ何も始まらない。これは非常にはつきりしております。

「主エホバの霊われに臨めり。こはエホバわれに膏をそそぎて貧しきものに福音をのべ伝うることをゆだね」

キリストの言葉に、

「幸福なるかな心(霊)の貧しき者。天国はその人のものなり」(マタイ5・3)

とありますように、この世的に満ち足りた者ではなく、自分の欠乏を感じる者、神様の前に己を投げ出している「貧しき者」が福音への最短距離なのです。

「貧しきものに福音をのべ伝うることをゆだね、我をつかわして心の傷める者をいやし」

やはりキリストの言葉に、

「幸福なるかな、悲しむ者。その人は慰められん」(マタイ5・4)

とあります。

この世の人は、何も悩みの無いこと、もう総てのものを持っており、子供たちにも恵まれ、良き夫にも恵まれ、そして仕事は順調にいく、健康である、全く欠くところ無き望月のような状態を幸福と称しておりますが、福音は必ずしもそうは言っていません。

「心の傷める者」、その者がそれを契機として、その場において主キリストという物凄い宝に出会える、主キリストというお方を知る。それが慰めどころか、大きな喜び、尽きぬ喜



びに変わる、これが幸福なのですね。だから、

「幸福なるかな、悲しむ者」

なのです。キリスト抜きのだんなに大きな喜びも一時的なものです。しばらくは続きませんが、また失われていくものですが、主キリストにあつて賜った喜びというものは消えないのです。

「心の傷める者をいやし」

とは、

「私（キリスト）がその人を癒すからね」

ということですよ。

「俘囚にゆるしをつげ、縛められたるものに解放をつげ」

キリストはいろいろな病から人々を癒されました。それを安息日にもなさいました。そのとき、パリサイ人が

「安息日にするな」

と、怒りました。キリストは何と答えられたか。

「あなたがたは自分の驢馬だとか、家畜が小屋につながれて閉じ込められているとき、安息日だからといって解き放つてやらないことがあるのか。必ず一日は解き放つて自由な空気を吸わせ、水を飲ませ、生命の喜びを与えてやるではないか。だとしたら、それらの家畜よりも、もっと素晴らしい、もっと愛されている人間、それが病や悪しき霊や運命の呪いや様々の束縛の中に呻吟している、その縄目を解き放つて、本当の自由の、生命の喜びに解き放つ、これが神の御旨である」

と答えられました。

「父は今に至るまで働き給う」

と、そう言って批判する者たちに対抗されました。ですから、許しの福音であり、解放の福音なのです。

「すべて哀むものをなぐさめ、灰にかえ冠をたまう」

灰を頭にかぶるのは、悲しみを表し、冠は新郎新婦の結婚式の被り物として、喜びを表します。だから、「灰にかえ冠を」は、「悲しみにかえて喜びをたまう」ということです。

「悲哀にかえて歡喜の膏を与え」

「膏」は聖霊のことを表しますから、聖霊という歡喜の霊をたまう、聖霊の歡喜を与えたもう。

「うれしいの心にかえて讚美の衣をあたえしめたもうなり」

憂いの心が在るところには讚美は出てきません。根源的な解決を賜わっている者に讚美が初めて生まれてまいります。心配事があるときには讚美は出てこない。

ゆるし、解放、慰め、そして歡喜と讚美、こうして、



「かれらは義の樹、エホバの植えたもう者、その栄光をあらわす者となえられん」

ということになります。

● 大いによろこび、わが神を楽しむ

次に10節にまいります。

「われエホバを大によろこび、わが靈魂はわが神をたのしまん」（イザヤ 61・10）

この世のいろんなことを喜びとする人はいくらいますが、

「神様を喜びとし、神様を楽しむ」

といった人は少ないですね。また、なかなかできないです。頭で考えてできることではありません。これは本当に主キリストに出会った人、主キリストを本当に受けとった人、イザヤ書第61章1節から3節をその身において味わった人、その人において初めて

「喜びのあぶらが溢れ、讃美の衣につつまれる」

のです。福音書を見ていたら分かりますね。

「ダビデの子よ、憐れみ給え」

と言って主の御名を呼んでいたあの目の見えなかった人が、

「主が呼んでおられるぞ」

と言ったならば、躍り上がって喜んでキリストのところへ行った。そして、癒していたいた（マルコ10・46）。また、ペテロとヨハネが生まれながら足の萎えた人に

「金銀は我になし、されど我にあるものを汝に与う、ナザレのイエス・キリス

トの名によりて歩め！」

と、その人の手を取って立たせた。引き上げたら彼は本当に立った。たちどころにくるぶしが強くなって、彼は自分の足で立ち、且あゆみ且おどり、もう全身で喜びを現している姿が使徒行伝第3章6節に出きます。あれが

「大いによろこび、わが神を楽しむ」

という姿です。即ち、「大いによろこび、神を楽しむ」ということは、まず主が我々をそのような歓喜の中に入れて下さるから、喜べるのです。

「われエホバを大によろこび、わが靈魂はわが神をたのしまん。そは我にすくい衣をきせ義の外服をまとわせて、新郎が冠をいただき新郎が玉こがねの飾りをつくるが如くなしたまえばなり」（イザヤ61・10）

結婚式というのは「ホッホツアイト」（Hochzeit）、人生の「最高の時」というわけです。そのホッホツアイトに新郎新婦がにこやかにしているように——いや、単なるにこやかさだけではなく、「すくい衣、義の外服」を着せてもらって新郎新婦の姿は真っ白です。神



様の前に出て行くときは真っ白ですね——そういう姿であるように、我々にすくいの衣を
そして義の外服をまとわせて下さる。これは十字架の御業です。キリストが十字架で我々
をすっかり贖^{あがな}って神の前に立たせて下さいました。だから、我々は、

「主を大いによろこび、わが靈魂^{たましい}はわが神をたのしむ」
ことができるのです。

「地は芽をいだし畑は蒔^まけるものを生ずるがごとく、主エホバは義と誉^{ほまれ}とを

もろもろの国のまえに生^{しょう}ぜしめ給うべし」（イザヤ61・11）

大地が芽を出し、畑は蒔^まかれた種から苗が育つてきますように、それが必然であるように、
エホバの神を知らない諸国に対して、少なくともイスラエルの残されたる民が義の樹^きとなっ
て生^おい茂^もつていく様を現し給うた。そういう情景ですね。

●あさ日の光輝、もゆる松火

「われシオンの義あさ日の光輝^{かがやき}のごとくにいで、エルサレムの救^{すくい}もゆる松火^{たいまつ}
のごとくになるまでは、シオンのために黙^{もだ}さず、エルサレムのために休まざ
るべし」（イザヤ62・1）

これはイスラエルの救いですね。具体的には南ユダです。その都であるエルサレム、こ
れをシオンと言っています。一度、国は敗れ滅びたのですが、それがもう一度回復されて
光輝く姿に変貌する。そのためそのときが来るまで神様の熱心、エホバの熱心は止まない
というのです。シオンの義が朝日の光輝^{かがやき}のごとくにはつきりと現れてくる。義と救いは一
つですから、エルサレムの救いが燃える松火^{たいまつ}のごとくに燃えるという。夜、松火は明々と
燃え盛ります。誰の目にもはつきりします。そのように

「あさ日の光輝^{かがやき}、もゆる松火^{たいまつ}のようにシオン、エルサレムの新しい栄え、主の
御名^{みな}にある栄えが必ず成就するぞ」

と約束されています。

「そのときまで私は休まない」

とおっしゃっています。

「もろもろの国はなんじの義を見、もろもろの王はみななんじの栄えをみん、
斯^{かく}てなんじはエホバの口^{みくち}にて定め給う新しき名をもて称^{とな}えらるべし」（イザヤ
62・2）

かつての古いイスラエルではない、背信のイスラエルではない、外敵に蹂躪^{じゅうりん}されたよう
なイスラエルではない、新しいイスラエルとして生まれ変わるのだ。これは歴史的な事実
としては、イスラエルの国の独立という回復された姿でしょうが、私はもつと内的な霊的
な事態だと思うのです。イスラエルという国は外的に立派であるとか、独立の王国である
とか、そういうことに存在理由があるのではなくて、本当の意味で神の心を心とする。旧



約においては、神のおきて、律法を賜った民として、見えないヤハウエーの神様を本当に信じ抜くという信仰の民として、存在理由があるわけですね。イスラエルの民の誇りは、そして存在理由は、ヤハウエーの神をいただいているということ、この神の聖名によりたのんでいるということでした。

ここでちょっと、「エホバ」という呼び方と「ヤハウエー」という神の名との関係にふれておきますと、ヤハウエーとは、モーセが民に示した神の聖名^{みな}でしたが、この神の名をあらわす四つのヘブル文字、「YHWH」はいずれも子音であつて、これがもともとどのような発音されたのか後には分からなくなつてしまいました。というのは、

「神の名をみだりに唱えてはならない」

というモーセの戒め^{いまし}を固く守つて、神の名を呼ぶかわりに「主^{アドナイ}」と呼んでいたのですが、後代になって、「ヤハウエー」を表す子音と、「アドナイ」の母音とが混同されて、「エホバ」という発音が生じてしまったといひます。

「我は有りて在る者なり」（出エジプト3・14）

と御自分の聖名をモーセに啓示されたことに由来する「ヤハウエー」という名と、「わが主よ」と呼び奉つた「アドナイ」という呼び方とが結合して生まれた「エホバ」という神の名は、「永遠の実存神にしてわが主」

という味わい深い意味内容を込めた呼び方ということになります。

こんな風に、まことの神との深い結びつきの中に存在理由を有していたイスラエルの民が、神への信仰を捨ててしまつていました。それは、バアルの神々を拝み、特に異民族との結婚などによつてです。その著しい例は北イスラエルの王となつたアハブのときです。アハブ王は、シドン人の王エテバアルの娘イゼベルを王妃に迎え、そのためツロのバアルの神殿をサマリヤに建て、自らバアルを礼拝する者となりました（列王紀略上16・29～33）。こういう不信仰なすがたではなくて、本当の信仰の純粋性を貫くということがここに願われていたのだと思います。

「もろもろの国はなんじの義を見、もろもろの王はみななんじの栄えをみん」

と、誰の目にもはつきりしてくると。

「エホバの口^{みくち}にて定め給う新しき名をもて称^{とな}えらるべし」

これは我々に置き換えて言ひますならば、

「キリスト召^{しょうだん}団よ！ 京都キリスト召^{しょうだん}団よ！」

と私はそう読むのです。昔のイスラエルにいくら呼び掛けられても私にはあまり関係がありません。ああ、そうだったのかということだけです。けれども、こういう預言書を通して常に今、我々に語りかけられているものとして読んで下さい。

キリストはよくイザヤ書を引いて会堂でお話になりました。何百年も前のイザヤの預言を自分の身に引き当てて、



「あなたが耳にした、この日にこの預言は成就した」

という言い方をなさったのです。パウロもしばしばイザヤ書を引いて

「あなた方は聞けども聞かず、見れども見ず、癒されることなからんためなり」

と、そういうことを引いてきたりしました。常に現在に引き寄せて、預言書を読んでいる。そうしますと、さきほどのイザヤ書61章10節からのところも我々のすがたです。

京都キリスト召団、これはキリストによって建てられた群れです。誰が何と言いましても、主が召し出して下さった小さき群れなのです。

外形、外見はみすばらしいです。会堂さえも持つておりません。そういうみすばらしい群れなのですが、けれども何が大事なのか。建物なのか、信仰箇条なのか、会員の数なのか、そうではない。大事なことは、

「主の御霊、我に臨めり」

です。御霊がそこに御臨在下さっているかどうかということです。それから、主が呼び出し、主が建て給うた群れであるかどうかということなのです。

それで、我々はイザヤ書61章10節のように、主キリストを大いに喜び、我々の魂は我が主キリストを楽しんでいます。何故ならば、主は私たちに救いの衣を着せ、私たちを義として下さいました。贖いの義を賜わった。救いの衣、義の上着、これをまとわせて下さったからであります。主はあたかも、新郎新婦の輝ける姿のように私たちを装って下さいました。そして、我々のところから芽を出し、苗が育つてくるように、義と誉れとを人々の前に、はつきりと明らかにして下さいさるのです。

それで、もう一度、62章1節へ帰りますが、主は、

「あなた方の義が朝日の光輝のごとくにいで、あなたがたの救いもゆる松火のようになるまでは私はお前のために休まない、黙さない」

と、言つて下さいました。主の熱心です。主の熱心が我々の上にかかってくる。我々はそのように顧みられています。それは主の誉れを語り継ががためであります。我々自身の幸福のためではありません。主キリストの栄光を現す者として、我々はこの地に建てられているのです。そういう者の群れなのです。

「もろもろの国は」「もろもろの王は」とありますところは、現代風にいえば、

「いろいろな宗教の方々も、キリスト教会の方々も、あなたの義を見、あなたの栄えを見る」

と。何も、それが本当の正道だとかいうのではなくて、それぞれの小さな教会が皆この気持で、我々が一番主に愛され、主によって大切にされているという自覚を持つことが大事なのです。子供たちは、どの子も自分が一番愛されている子供だと信じて疑いません。親はどの子も100%にその子において、その子らしく愛して、最善を成そうとしているはずで、それぞれ特徴や持味がありますから、それぞれが花咲く百花繚乱です。画一的じゃない、



全体主義的でない、本当の個というものを大切に、個を100%、花を咲かせる。それが神様の愛です。無秩序かというところ、そうではありません。それぞれの花が麗しく咲き誇っている姿が神の栄光を現しているのです。砂漠は番紅のごとくに花咲き（イザヤ35・1）とありますように、人間的に統一した何か秩序を作り出すことが栄光ではありません。そのように見ますと、このイザヤ書62章は非常に嬉しい御言なのでね。

「なんじ主の口にて定め給う新しき名をもて称えらるべし。また汝はうるわしき冠のごとく主の手にあり」（イザヤ62・2～3）

キリストがあなたを抱いていて下さいます。キリストがあなたを掌の中に刻み込んでいて下さいます。

「王の冠のごとくなんじの神のたなごころにあらん。人ふたたび汝をすてられたる者といわず、再びなんじの地をあれたる者といわじ。却てなんじをへふジバ（我が悦ぶところ）となえ、なんじの地をべウラ（配偶）となうべし。そはエホバなんじをよろこびたもう」（イザヤ62・3～4）

「私は主をよろこび、わが靈魂はわが神を楽しむ」とありました。ここは、

「主の方があなたを悦び給う」という方が先なのです。

「主なんじをよろこびたもう（略）。わかきものの処女をめとる如くなんじの子輩はなんじを娶らん。新郎の新婦をよろこぶごとく、なんじの神なんじを喜びたもうべし」（イザヤ62・4～5）

子孫たちがあなたを娶るとはどういうことなのか、この「なんじ」というのは、シオン、エルサレムです。ですから、イスラエルの代々の民族と子々孫々までも、このシオン、エルサレムというものを大事に大事に愛しむという気持です。

それで、我々「召団」ということになりますと、今いる我々だけではなくて、後に生まれて来る者も、霊の子供たちも総てこれを喜びとするという気持だと思ふのです。

「花婿の花嫁を喜びごときなんじの神、なんじを喜びたもうべし」と、61章10節から62章5節までは非常に明るいところです。

●御言という食物

6節からはイスラエル民族の現実的な姿、その祝福の姿です。今まではいろいろと外敵に支配されたり、苦しいことがありましたが、これからはそういうことはないよという、慰めと励ましという言葉です。

「エルサレムよ、我なんじの石垣のうゑに斥候をおきて終日終夜たえず黙す



ことなからしむ。なんじらエホバに記念したまわんことを求むるものよ、自らやすむなかれ。エホバ、エルサレムをたてて全地に誉をえしめ給うまでは息め奉るなかれ」（イザヤ62・6～7）

要するに、今までのようにだらしない姿ではなくて、

「これからは本当にいつも主と一つであれよ」

ということですよ。

「エホバその右手をさし、その大能の臂をさし、誓いて宣給く。われ再びなんじの五穀をなんじの敵にあたえて食わせず、異邦人はなんじが労したる酒をのまざるべし」（イザヤ62・8）

今まではイスラエルが一生懸命に種を蒔き収穫をした物を全部、外敵に取られてしまつて、敵がそれを欲しいままにしていました。これからはお前の勤労の実はお前の子孫が食べるができるのだということです。あなたは働く人、私は食べる人などと、外なる者がそれを掠めていくということをさせない。

「収穫せしものは之をくらいてエホバを讃たたえ、葡萄をあつめし者はわが聖所の庭にて之をのむべし」（イザヤ62・9）

こういう回復された姿ですよ。

「門よりすすみゆけ進みゆけ、民の途をそなえ、土をもり土をもりて大路をもうけよ。石をとりのぞけ、もろもろの民に旗をあげて示せ。エホバ地の極にまで告げてのたまわく。汝等シオンの女にいえ、視よなんじの救いきたる、視よ主の手にその恩賜あり。はたらきの価はその前にあり。而してかれらばかり民またエホバにあがなわれたる者となえられん。なんじは人にもとめ尋らるるもの、棄られざる邑となえらるべし」（イザヤ62・10～12）

要するに、非常に繁栄が回復されました、人はそこへ慕い求めて集まつて来ます。誰も人が住むところのない、ひなびた荒れ果てた邑（村）という姿ではなく、生き生きとした希望の邑に変わるよ、という預言なのです。我々にとりましては、外的なことよりもつと内的な面での祝福、本当に主が我々を喜び給うてあるということ、そのことが喜びです。

主の贖いの御愛の故に我々は生命を賜った。死の様から、生命へと変えていただいた。我々の功は何も無い。我々は痛める者、悲しめる者、傷つける者、汚れたる者、躓き倒れたる者であった。そういう者に主の御手が臨んで、

「我なり、恐るな、心安かれ」

と迫って下さった。

皆さん、本当にどのようにして、自分が主に会ったか、どのようにして主の御許に帰つて来たか、そのときを顧みて下さるならば、それは決して自分の最高の絶頂というときではありません。本当に自分の辛かりしとき、自分の靈魂が正に消えゆかんとするとき、も



うこのままでは滅びだと、「SOS」を発しているときに主さまの愛の御手が臨みました。光が射して来ました。そのとき、ただ「主よ！」と叫んだだけなのです。何一つ、自分の方からは善いことをしなかった。けれども、主は

「わが愛に居れ、われ汝を贖えり」

と御言を下さり、力を与えて下さったのです。

「我に従え」

とおっしゃって下さったのです。

「はい、お従いします」

「この道を行け」

と。初めは良く分からなかったが、段々とその道が明るくなつて来ました。

皆さん、福音書を本当に自分の旅路の友として下さい。福音書を義務で読むのではなく、本当に生命の糧として読んで下さい。時には響いてこないときもあるでしょうし、読んでいて辛いこともあるでしょう。ですが、そういうことで諦めないで、とにかく、響いてくるまでしっかりと読むという習練を積んで下さい。私は皆さんにいわゆる立派な人間になるために修養せよとは申しません。

「朝は何時に起きて祈りをし、一日中何一つ悪しきことを口に出さず、心に悪しき

思いは抱かず」

という、そういった意味での

「潔められたクリスチャンになりなさい」

というようなことは申しません。願われることは良いですが、全部、主に委ねて、

「ただ、主よ、御言を下さい。主よ、あなたの御言に、はいと従わせて下さい。あなたを喜びとする靈魂にして下さい。この世のつまらないことに、心を乱されないで、本当にあなたを喜びとする生き様、そう成らせて下さい」

と、主にしがみつく努力をしていただきたいのです。寝転がっていたのでは、この世のサタンがあなたがたの靈魂の上にセメントを塗ってコンクリートで固めて窒息するようにしてしましますから。

だから、主に立ち帰る、主さまに何とかしがみつく、その努力はしていただきたいのです。福音は怠けていてはだめです。しかし、努力の方向が、自分で自分を立派にするという努力ではなくて、本当に主さまにしがみつく努力をしていただきたい。

そのところを履き違えないで、それぞれに工夫をしていただきたい。時間を決めて祈ろうとする人はそのようになさっていたきたいし、やはり、具体的に実践しないと駄目です。理屈ではありません。先に村岡兄が言われましたが、

「まず仕事があつて、まずこの世の何かがあつて、それからお釣りの時間ができたら、聖書を読もうというのだったら駄目です」



と。それは駄目です。我々の生活を見ている、まず疲れたときは休みます。おなががすいたら食事をいただきます。必要な物は取ります。我々は肉体のためにはそうします。それをせずに無理をしたら、身体を壊しますから。身体を壊すほど働いても、決して自慢になりません。それは神様の賜った身体を粗末にしているのだから、自慢にならない。やむをえずに、本当に自由を奪われてそうせざるを得ないときはしょうがないですが。そうでなければ、やはり生活というものは身体を労^{いたわ}つてやらないといけません。身体が必要な食物や休息を取らねばいけないように、^{たましひ みことば}霊魂は御言という^{いのち}生命、御言という食物をいただかないと必ず^{こかつ}枯渴します。一日、二日では表に現れないかも知れませんが、数日に及び、十日にも及びますと、必ず^{うつつ}霊魂は枯渴して虚ろになります。生活が不安になります。

「岩の上に家を建てたる^{さと}聡き人」というキリストの御言があります。

「我が言^{ことば}を聴きて行^いう者は、如何なる人に似たるかを示さん。即ち家を建つるに地を深く堀り岩の上に基^{もと}を据^すえたる人のごとし。洪水^{おほみづ}いで流^{ながれ}その家を衝^つけども動か^{あた}すこと能^{あた}わず、これ固く建てられたる故なり。されど聴きて行^いわぬ者は、基なくして家を土の上に建てたる人のごとし。流その家を衝^つけば、直ちに崩^{くず}れて、その破壊^{やぶれ}、甚^{はなは}だし」（ルカ6・47、49）

日頃は分らないが、大雨になったり、嵐が来たときには、はつきりと現れてきます。聞きつぱなしの人は砂の上に家を建てた愚かな人である。大水が押し寄せて来た時、ひとたまりも無い。

●ロゴス・キリスト

あと少しの時間をいただきまして、ヨハネ伝とガラテヤ書を見ていきます。イザヤ書の延長なのです。

「太初^{はじめ}に言^{ことば}あり、言は神^{とも}と偕^{とも}にあり、言は神なりき」（ヨハネ1・1）

この「言」というのは霊なるキリスト、ロゴス・キリストといわれています。御^{みたま}霊のキリスト、この地上に現れ給う前の神様とご一緒にいらしたキリストの姿、これを「言」といっています。これは、ヨハネ伝第17章でキリストは最後の祈りをなさっていますが、そこでご自分でおっしゃっています。

「父よ、まだ世のあらぬ^{さか}前に、わが汝と偕^{とも}にもちたりし栄光をもて、今御^{みたま}前にて我に栄光あらしめ給え」（ヨハネ17・5）

まだ世の造られぬ先に、このキリストは霊なる御姿で神様とご一緒に居られた。

「私があなたとご一緒にいたっていました栄光、その輝きをもつて、今、栄光を在らしめて下さい」

ずっと今まで、隠されていたのです。知られざる姿でキリストは地上に居られました。そ



れがいよいよ、終わりのときが来ました。

「今こそ、あなたの栄光をもって私を輝かせて下さい」

と祈っておられるわけです。

「世のあらぬ前に、わが汝と偕にもちたりし栄光をもて」

と。このお姿が

「はじめことば太初に言あり」

とつながっているんですね。「言」といっても、言語ではない。霊なる言（れいげん霊言）、本当の実体、見えざる物質的でない本当の实在、霊なる生命、そういう姿でキリストが居られました。その姿が「はじめことば太初に言あり」と、この言は神の性質を帯びていました。

「よろず万の物これに由りて成り、成りたる物に一つとして之によらで成りたるは

なし。之に生命あり、この生命は人の光なりき」（ヨハネ1・3、4）

成りたる物はみんなそうだ、そして、その言は生命であり、光でありました。それから、

「まこともろもろの人をてらす真の光ありて、世にきたれり」（ヨハネ1・9）

万人を照らす真の光がこの世にやって来ました。この世はキリストと無縁ではありませんでした。キリストはこの世を愛して、この世に降くだつて来て下さいました。

「彼は世にあり、世は彼に由りて成りたるに、世は彼を知らざりき」（ヨハネ

1・10）

これを我々に当てはめると、我々は父母から生まれました。生みの親の母も含めて、本当にこの世に生み出して下さったのは、実はこのキリストというお方でした。お母さんはまたその母から生まれ、そのお母さんはまたその母から生まれ、どこまでいっても切りがない。それらの根源は実はキリストであつた。しかも、キリストはこの世に居て下さった。我々が生まれたときよりずっと、キリストは一緒に居て下さった。

ところが我々の方がそれをちつとも知らなかった。物心がついていても知らなかった。そして、人生のあるときに初めて、このお方に巡り会って、

「お前のことはずっと、知っていたのだよ。私がお前を造つたのだよ。お前はその

私を、今まで知らなかったね」

と、おっしゃっているのです。

「かれは己の国にきたりしに、己の民は之を受けざりき」（ヨハネ1・11）

親が子供を捜し当てて、

「私がお前の造り主だよ、私はお前の主だよ」

と、おっしゃっても、

「そんなこと、知るものか」

と言って拒んでいる、これが人間の生まれながらの肉の姿なのです。しかし、魂の目を開かれて、キリストを受け入れた人、その名を信ぜし者には、神の子という新しい名前を下



さる。新しい質を下さる。

「神の子となる権を与え給えり」

です。

「お前は神の子だよ」

と呼んで下さるのです。そのような人は血脈ちすじによらない、肉の欲ねがいによらない、人の欲によらない、ただ、神ご自身によつて生まれた存在なのです。

このキリスト召団もそうだと思います。これは人の欲ねがいによらない、血脈ちすじによらない、肉の欲によらない、ただ神によつて生まれしエクレシア、キリストの群れであります。キリスト者の群れ、キリストの御体であります。他の何が無くても、この信、

「主が我々を生み出し給うた。主が我々のこの群れを建て給うた。御名みなの栄光を現すために、恵みを語り伝えんがために、我々をこのように建てて下さった」
のです。

そういう自覚を持たないと存在理由がありません。その御意みこころに応え奉りたい、そういうことなのです。誰々先生のため、誰々君のためではない。本当に主イエス・キリストの御旨みむねゆえにと、私は自覚しています。

ヨハネ伝第1章14節から、これはまた、キリストのお姿ですね。

「言ことば(靈なるキリスト)は肉体となりて我らの中に宿りたまえり、我々と同じ姿になって、我々の中に降くだつてきて下さった、

我らその栄光を見たり、実に父の独子ひとりごの栄光にして、恩恵めぐみと真理まこととにて満てり」

(ヨハネ1・14)

父の愛を真の意味で現して下さいました。「真理」というのは、本当に頼りになるもの、当てにできるもの、移ろい行かざるものです。その他のものは蜻蛉かげろうの如くに一時的で、はかなかったり、頼りにならなかつたり、消えてしまつたりする幻のようなものです。しかし、キリストというお方は恩恵とリアリティ(Reality)、手ごたえがあり、本当に頼りになります。これだけは間違いないと安心して言えるお方、靈なる人格、永遠の実在者、永遠の生命、そういうものに充満したお方であります。

「我らは皆その充ち満ちたる中うちより受けて、恩恵めぐみに恩恵を加えらる」(ヨハネ

1・16)

キリストの内に充満しているものを我々に惜しみなく与えて、恩恵めぐみに恩恵を加えて下さいます。

「おきて律法はモーセによりて与えられ、めぐみ恩恵と真理まこととはイエス・キリストによりて来きたれるなり」(ヨハネ1・17)

この「恩恵と真理」という言葉で表す他には仕方がないような実体、事態というものは、イエス・キリストを通して我々のところへやつて来しました。パウロが「キリストの愛」と



言っていますが、そのキリストの愛の広さ、深さ、高さ、この方の素晴らしさに感嘆しています（エペソ3・18）。パウロは宇宙的な気宇を抱いた魂、宇宙を駆け巡っているような偉大な魂です。キリストに充滿され、圧倒されています。そのパウロが

「神様は我々に万物を賜う、キリストに在りて万物を賜う」

と言っている（ロマ8・32）。こういう無限無量なるキリストに我々は

「我が喜ぶ者よ」

と呼んでいただくのです。

「我が愛する者よ」

と呼んでいただく。そして、我々は

「主イエス・キリスト様！ 主さま！ このような小さな存在をかくも愛し給うのですか。本当なのですな」

「そうだよ、本当だよ」

と。キリストは

「もしこの人たちが黙れば、石が叫ぶ」

と、おつしやいました（ルカ19・40）。いと小さき者を100%に愛して、それに自身を現し、ご自身を注いで下さる、与えて下さる。そういうお方でありますから。このキリストを知れば知るほど、この世というものは、この人生は捨てたものではないと思います。人生は矛盾だらけであり、いろいろなことで傷ついたり、躓いたりいたしましても、このキリストがいます故に一切はプラスになっていきます。

「凡てのこと相働きて益となるを我らは知る」（ロマ8・28）

一切は益となっていく、一切を益とならしめ給うという事態が成っていくのです。

「斯のごとく御霊も我らの弱を助けたもう。我らは如何に祈るべきかを知ら

ざれども、御霊みずから言い難き嘆きをもて執成し給う。また人の心を極め

たもう者は御霊の念をも知りましたもう。御霊は神の御意に適いて聖徒のために

執成し給えはなり」（ロマ8・26、27）

そのように、皆さんのお一人お一人の中にキリストが内住し、のつぴきならない一対一の関係になって下さいます。

「我、汝を愛しむ」

「はい、主さま。あなたの他に私は誰を天に持ちましょうか。また、他のことは求めません」

という、突き抜けたところへいらつしやってこそ勝利があるのです。他のことに捕われたり、振り回されていたら駄目です。そんなものは突き抜けていなければいけません。人を恨んでいた、いろいろなことをあげつらつたり、そういうことに靈魂が掻き乱されていたら駄目ですね。イザヤ書の



「われエホバを大^{おお}によろこび、わがたましひはわが神をたのしまん」

これが本当に言えるということは、他のことはもう眼中にないということなのです。そんなものは在れども無きが如し。そんなものは無くなるのではないが、問題ではありません。そういう雲を遥^{はる}か下に見て、自分はどんどん高い、もう澄み切った大空の中に引き上げられている。太陽が燦々^{さんさん}と輝いている。ごたごたはみんな雲の彼方^{かなた}。本当にそこに徹していただきたい。

「恩恵^{めぐみ}と真理^{まこと}はイエス・キリストによりて来^{きた}れるなり」

「あなたのために来たのだよ」

と、そのように読んで下さい。客観的に、「ああこの地球にキリストはやって来ましたか」ということではありません。あなたのところに来られました。

「恩恵^{めぐみ}と真理^{まこと}はイエス・キリストによりて（汝^{きみ}に）来^{きた}れるなり。未だ神を見し者なし、ただ父の懷裡^{ふところ}にいます独子^{ひとりご}の神のみ之を顕し給えり」（ヨハネ1・17

～18）

●新たに生まれる

いつも申しますように、キリストにおいて神を見る。キリストにおいて神の愛を見る。キリスト抜きで哲学的に思考した神様、これは人間の産物ですね。人間が造り出したものです。そういう神ではなく、キリストにおいて本当の神様に会って下さい。

「我^{われ}を見し者は父を見しなり」（ヨハネ14・9）

「我が業^{わざ}は我が業にあらず。父、我が中に在りて成し給うなり」

と。キリストご自身がそういう自覚を持っておられました。

「聖書の中に永遠の生命があると思つてあなた方は一生懸命に調べている。けれども、聖書は私のことを証言している。ところが、あなた方は私の処へ来ないではないか」

と言つておられます。

「汝^{きみ}らは聖書に永遠^{とこしえ}の生命^{いのち}ありと思つて之を査^{しら}ぶ、されどこの聖書は我^{われ}につき証^{あかし}するものなり。然^{しか}るに汝^{きみ}ら生命を得んために我^{われ}に来^{きた}るを欲せず」（ヨハネ

5・39～40）

パリサイ人が旧約聖書の研究を一生懸命にやつて、いろいろ議論しているが、

「聖書は私のことを証言している。私がいわば、聖書なのだ。我が内なる生命、これを受け取れ」

と言つて、キリストがそこに立つておられるのに、キリストをのけ者にしている、というのが人間でありました。

それから、ヨハネ伝第3章3節にニコデモに対して、



「まことに誠に汝に告ぐ。人あらたに（上から）生まれずば、神の国を見ることと能^{あた}わず」。ニコデモ言う『人はや老いぬれば、いかで生まるる事を得んや、再び母の胎に入りて生るることを得んや』（ヨハネ3・3〜4）とあります。ニコデモは人間的な肉の誕生のことを思っています。

「イエス答へ給う『まことに誠に汝に告ぐ、人は水と霊によりて生まれずば、神の国に入るに能^{あた}わず』（ヨハネ3・5）」

神の国を見るとか、神の国に入るとかいう具体的な事態です。

「肉によりて生まるる者は肉なり、霊によりて生まるる者は霊なり。なんじらあらたに生まるべしと我が汝に言いしを怪しむな。風は己が好むところに吹く、汝その声を聞けども、何^{いずこ}処より来^{きた}り何^{いずこ}処へ往^ゆくを知らず。すべて霊によりて生まるる者も斯^{かく}のごとし」。ニコデモ答えて言う、『いかで斯^{かか}る事どももあり得^うべき』（ヨハネ3・6〜9）

ニコデモは大変な学者でした。ところがイエスはこのようにして、

「神の国は人間の延長線上にあるものではない。いわゆる人間的な宗教の延長線上に来るものではない。上から新たに霊によつて神様に生んでもらうことによつて、初めて新しい生命というものは得られると。その人にして、初めて神の人であり、神の民となる。具体的に神の国を受ける。非常に具体的なリアルなことなのだ」と言われたのです。全く、ニコデモは分かりませんと言つて降参してしまいました。

ヨハネ伝第1章12節に、

「その名を信ぜし者には、神の子となる権をあたえ給えり。斯^{かか}る人は血^ち脈^{すじ}によらず、肉の欲^{ねがい}によらず、人の欲^{ねがい}によらず、ただ神によりて生まれしなり」

とあります。「神が生み出し給う」ことと「新たに生まれる」ということは同じなのです。これは神様が成して下さること、人間が自分で生み出すことはできません。これはもう、祈つて主様にそうして下さいと、お願いするしかありません。

主様だけが我々に第一の誕生を下さつた造り主でした。ところが、本当の第二の誕生、この新しい霊^{しんせい}的な「新生」、これが最も大事なことです。肉の誕生は、皆神様の法則に従つてこの地上に生を受けて来ました。生物的にいいますならば、皆そう成つて来ました。けれども、それで神の民か、神の国に入るか、そうではない。次の第二の誕生は、キリスト教の知識があつても駄目、

「上より生まれることをやらなければ駄目なのだよ」

と。これは最も大事なことです。先ほどのイザヤ書の

「われエホバを大^{おお}によろこび」

「わが靈魂^{たましひ}はわが神をたのしまん」

「そは我にすくい^{うわぎ}の衣をきせ義の外服^{うわぎ}をまとわせて」



とかあります。この実体は

「新たに生まれる」

という、これなのです。主は我々を喜んで下さる。我々を愛して下さる。我々にこの新しい誕生を得しめんとて、この世に来て下さったのです。

主様が何のために十字架に懸かって下さったのでしょうか。主が十字架に懸かられたときに古き私たちもここで一緒に十字架されているのです。主が十字架にお付きになったときに私も一緒に十字架されました。私を抱き取って、私を背負って、主は十字架の裁きを受けて下さいました。現実には私は十字架の外にいましたけれども、主様は私という存在そのものを背負って十字架に懸かって下さいました。

「お前の受くべき裁き、私は皆お前の知らないところで引き受けたよ。それしか、お前の新しくされる道は無いのだ。お前はいろいろと他の道を探しただろう。でも行き詰まりだった。そこからは何も生まれなかった」

と。疲れ果て、傷つき、破れ果てたときに、この十字架が目の前に浮かんできた。

「主様、あなたは私のために十字架を負って下さったのですね。あなたが砕かれ給うたその中に、私の砕けがあつたのですね。私は自分を捨てようと思つても捨てられませんでした。憎しみの心であれ、裁きの心であれ、呪いの心であれ、己を惜しむ心であれ、誇る心であれ、総て自分^{すべて}は捨てたいと思いました。また、本当の意味で人を愛したいと思いました。が、全部、落第でした。自分を待つているのは滅び、地獄でしかありません。そういう私をあなたは既にここで贖^{あがな}つていて下さったのですね」

と。それが

「救いの衣、義の^{うわぎ}外服をまとわせ」

ということなのです。帰って来た放蕩息子^{ほうとうむすこ}に対し（ルカ15・22）、

「さあ早く身体を洗って指輪をはめてやり、新しい最上の衣を着せてやって、一緒に喜ぼうではないか」

と放蕩息子の父は言いました。新しい誕生ですね。

「私は父に対しても、天に対しても、罪を犯しました。息子と呼ばれる資格はありません。雇^{やと}い人の一人にして下さい」（ルカ15・21）

その砕けの心を放蕩息子の父は知っているのです。

「救いの衣、義の^{うわぎ}外服」

というのは、そういうことであります。本当にここで主様と一つになれば、新たに生まれることはできません。「主の十字架は我がためなり」です。

「我キリストと^{とも}偕に十字架につけられたり。最早^{もはや}われ生くるにあらず、キリスト我が内に在りて生くるなり」（ガラテヤ2・20）



これを本当に受け取る人は新たに生まれます。そのときに

「我、汝を喜ぶ」

という御声^{みこえ}が聞こえてきます。

「我、汝を捨てじ」（ヨハネ14・18）

と。十字架上の盗賊の一人のように、

「汝、今日、我とともにパラダイスに在るべし」（ルカ23・43）

との御声です。そのことはヨハネ伝第3章9節に出てくる。ニコデモが

『いかに斯^{しか}る事どもあり得べき』。

どうしたらそんなことができるのでしょうか、と聞いた。

イエスは『貴方^{あなた}はイスラエルの先生なのにどうしてそんなことを知らないのか。……天より降りし者^{くだ}、即ち人の子の他には、天に昇りしものなし』（ヨハネ3・9～13）

不思議なことを書いています。降つて来られた方が十字架を通つて、また天に昇つていかれる。贖^{あがな}いの業^{わざ}を終えられてまた天に昇つていかれる。

「モーセ荒野^{あらの}にて蛇^{へび}を挙げしごとく、人の子もまた必ず挙げらるべし」（ヨハネ3・14）

十字架です。蛇、青銅の蛇を仰ぎ見た者は癒されました（民数記21・9）。キリストは呪いの蛇となつて下さいました。

「すべて信ずる者の彼によりて永遠^{とこしえ}の生命^{いのち}を得ん為なり」（ヨハネ3・15）

皆、この十字架を現しています。十字架と一つにされる者に注がれる生命、新しき生命、霊の誕生、これを指しています。このようにヨハネ伝3章にちゃんと十字架が出てくるのです。それが前の方には何も無いでしょう。ここではもう、ニコデモとの対話を通して十字架が示されています。出て来る場所が早すぎますね。しかも、このような形で書かれていますから、なかなか、人は気づかないでしょう。

「天より降りし者^{くだ}、即ち人の子の他には、天に昇りしものなし」

と。どん底に降り、また天に帰り給いました。

●真を行う者は光に来る

「それ神はその独子^{ひとりご}を賜^{たま}うほどに世を愛し給えり、すべて彼を信ずる者の亡びずして、永遠^{とこしえ}の生命^{いのち}を得ん為なり。神その子を世に遣^{つか}わしたまえるは、世を審^{さば}かん為にあらず、彼によりて世の救われん為なり」（ヨハネ3・16～17）

世を滅びに定めようとして、御子^{みこ}を遣わされたものではありません。

「彼を信ずる者は審かれず、信ぜぬ者は既に審かれたり。神の独子^{ひとりご}の名を信ぜざりしが故なり。その審判^{さはん}は是^{これ}なり。光、世にきたりしに、人その行為^{おこない}の悪



しきによりて、光よりも暗黒を愛したり」（ヨハネ3・18～19）

これしか救いが無いのにそれを拒む。これが審きです。光が、生命が、許しが、愛が、この世にやってきたのに、人は自分の行為が悪いからその愛を拒み、暗黒を愛した。

「すべて悪を行う者は光をにくみて光に來らず、その行為の責められざらんとなり」（ヨハネ3・20）

一時的にはごまかしが効く。しかし、それはだめです。

「真をおこなう者は光にきたる、その行為の神によりて行いたることの顕れん為なり」（ヨハネ3・21）

「真の中に生きようとする者は光に來る。その行為の神によることが顕れるために光に來る。神を信じることは神の業である」

と、キリストはおっしゃいました。「真の行為」とは、まずキリストの中へ立ち帰って來ることです。

「上より來るものは凡ての者の上にあり、地より出づるものは地の者にして、その語ること地事なり。天より來るものは凡ての物の上にあり」（ヨハネ

3・31）

いろいろな本や知識があり、それはそれで悪くはありませんが、所詮、多くは地のことです。

本当に大事なきほどの

「永遠の生命の井戸、泉」

を下さるのには聖書と主イエス・キリストです。これを離れていろいろな世の知識を集めて知的に自分を豊かにしても、それは空しい。

「彼その見しところ、聞きしところを証したもうに、誰もその証を受いれず。

その証を受くる者は、印して神を真なりとす」（ヨハネ3・32～33）

肉なる者はなかなか受けない。しかし、その証を受け取った者は真に神は本当だと、神様はリアルなお方、真実なお方だと告白せざるを得ません。

「神の遣わし給いし者は神の言をかたる、神、御霊を賜いて量りなければなり」

（ヨハネ3・34）

キリストはこの神の御霊の充満体でありました。

「自分からは何もできない、自分は何もしてない」

とおっしゃいました。我々もそうありたい。

「御霊を賜いて量りなければなり」

と。神の言を語る、そういう存在にさせていただきたいです。

「父は御子を愛し、万物をその手に委ね給えり。御子を信する者は永遠の生命をもち、御子に従わぬ者は生命を見ず、反って神の怒りその上に止まるなり」

（ヨハネ3・35～36）



御子に従わない者は、自分で自分の始末をつけなければいけませんから。

●十字架に現れし御愛

ガラテヤ書6章にいきましよう。

「然れど我には、我らの主イエス・キリストの十字架のほかに誇る所あらざれ。之によりて世は我に対して十字架につけられたり、我が世に対するも亦然り」

（ガラテヤ6・14）

別に誇らなくてもいいですが、この十字架に現れし神様の御愛、キリストの愛、これが私の究極である、根源であるということです。我らの主イエス・キリストの十字架の他に私の拠り所はありません。依って立つ存在理由はありません。肉的な思い、この世というのはこの十字架で死んでいる。私もまた、この世に対して直接の関わりを持たない。十字架を通してこの世を見えています。

「それ割礼を受くるも受けぬも、共に数うるに足らず、ただ貴きは新に造らるる事なり」（ガラテヤ6・15）

パウロはここで割礼を問題にしましたが、今流に言いますと、いろいろなことがあります。「洗礼を受けるも受けぬも」という人もあります。「いろいろな律法を守るも守らぬも」という人もあります。「立派な教会堂があろうと無かろうと」と言ってもいいでしょう。とにかく、ここでパウロが言いたいのは、いろいろな、人間が定めたこと、あるいは、外形的なことではなく、本質的な

「上から生まれる、霊の生命」

これが大事だということ。何が本当に大事か。それをすり替えたらいけないと言っている。究極なるものは何か。

「ただ貴きは新に造らるる事なり」

と、これだけだと言ったのです。上より生まれること、

「人、新たに生まれずば」

と、この一事だと。それは十字架が我々に与えてくれます。

「十字架に本当に己が身を投げ入れなさい。その中で祈りなさい。主の御名を呼びなさい。もう、自分を問題としないで下さい」

と。

「古き我は主と共に十字架につけられたり」

と、十字架につけられた人がこの世の事でごたごたと言っていたら、おかしいです。同じ次元でごちゃごちゃ言っていたらおかしい。それではまだ本当に自分が十字架されていることを受け取っていない。

「世は我に対して十字架につけられたり、我が世に対するも亦然り」



と、別次元の人になつてゐる。私は一度死んでいます。古き我は死んだ。貴きはただ新たに造られること、これだけです。この新たに造られた私、この新しい生命をこそ、主は喜び給う。

「エホバ、汝を喜び給う」

「我が喜ぶところ」

と、

「主がお前を喜ぶ」

と言つて下さる。新しく生み出そうとしてあなたを愛して下さっています。

総てそちらに向かつています。

「ただ貴きは新に造らるる事なり」

「此の法に循いて歩む凡ての者の上に、神のイスラエルの上に、平安と憐憫あわれみ

とあれ」（ガラテヤ6・16）

これこそ、真実の、神のイスラエルです。神の子孫です。その人達の上に平安と憐憫（あわれみ）とあれと。

「今よりのち誰も我を煩わづらわすな、我はイエスの印を身に帯びたるなり」（ガラテヤ6・17）

「私（パウロ）はもう、キリストという焼印が押されている。キリストの奴隷である。キリストにだけ私は属す。新たに造られた私はキリストの者なり。

他のことで私を苦しめないでくれ」

とあります。こんなふうに見ていきますと、イザヤ書、ヨハネ伝、ガラテヤ書は本当に一つのものが貫いています。何が一番大事かというと、外側ではない、外側の立派さではありません。

「汝の内なるキリストの御霊みたま、それがお前の生命いのちだよ。それをキリストが身を捨てて、あなたに下さった。あなたの贖あがないを終えて、約束の御霊として、あなたの中に宿り給うた。これが新しく造られるということ。そのことを本当に受け取りなさい。それが本当に受け取れるまで、しっかりと祈りなさい」

ということですよ。

●御霊の火で燃えよう！

さきほど、若王子山にやくおうじの祈りのお話しにもありました。何の為の祈りかというと、こういうことをしっかりと受け取れる為の祈りをしていたのです。この世を離れて山に行つて大声を出し、本当に我を忘れて、「主様！」と叫ぶ声に自分を託します。なかなか、人間は自分で自分を離れられないから、そのように本当に馬鹿になつて、幼児おさなごになつて、主様の贖いの深さ、御愛を身体に刻み込むということが私にとっては祈りでありました。



そのことが貫かれますと、すっかり土台ができましたら、後は本当に水が高きから低きに自然に流れて来るように、全部入って来るのです。いわゆる、難行苦行ではありません。本当にこの十字架を受け取るための生みの苦しみは、皆さん、していただきたい。これはごまかしが効きません。メッキは剥^はげてしまいます。これがはつきりしていたら、本当に我一人でも、独^{ひと}りたりとも我行かんです。何か、群れを頼んで何かしないとできないという、そんな頼りない人間ではない。私という石ころから御霊の子等が生まれてくるのだという自覚が湧いてきます。

「勇者は独りあるとき強し」

といいます。キリストに在る勇者、キリストが力と成り給う、その人は強い。己^{おのれ}を当てにしないから倒れません。そういうことが「二十歳の原点」という言葉で表されている事柄ではないだろうかと思われます。どうぞ、大人にならないで下さい。大人というのは、

「ああ、人生とはこんなものさ」

と何でも分かったようなことを言い出すのです。

そういう人間の分かったようなことの中に人生を閉じ込めないで、無限に開いて下さい。神様の世界は無限に開かれています。もつともつと新しいことを成すぞ、大いなる業^{わざ}を成すぞと。創造の神ですから、創造主なのですから。創造主というのは我々万物をお造りになっただけではなく、どんどん新しいことを成して下さい。

「我、新しき業^{わざ}を成さん」

とおっしゃって下さる神なのですから、キリストなのですから。そういうものを造りあげて、人に求めるのではなく、己に、己の中に求めて下さい。

私は集会が沈滞していると感じる時があります。そんな時は、自分が燃えていないからだと思います。自分が燃えたら、自分が火となったら集会は燃えると、いつもそう思ってきました。言葉に出さなくてもそう思ってきました。今回、村岡兄がそれに似たことを司会の中でおっしゃいました、「燃えよう！」と。本当に一人ひとりの皆さんが、自分から、自分が火元になろうと。火事の火元は困りますが、自分が御霊の火の火元になろうという気持で、主様と取り組んでいただきたい。一人ひとりの兄弟姉妹に燃えていただきたい。

阪神タイガースだけを燃やしてはだめです(笑い声)。私などは何を見ている、信仰のことに置き換えてしまう。ああ、亀山選手、あの様に我々も二十歳の原点に帰ろう！とかね。総てそうです。

ですから、この世のことをも福音に取り込んでしまうのです。素晴らしいものは素晴らしい。感動するものには感動する。人間は、そういう気持で、いつも新たでありたいと思います。それでは、これからご一緒に祈りたいと思います。



●熱禱

主様！ 御名を讃えて感謝申し上げます。外は暑いですが、その暑さを上回る熱い話を致しました。あなたが僕の中で燃えて下さったからでございます。

主イエス・キリスト様、一人の魂が燃えれば、それは互いに響き合い、感染し、火は大きくなっています。どうぞ、この京都キリスト召団という小さな群れの中にあなたの火が燃え、大きな火となつて燃え上がして下さい。主イエス・キリスト様、人間的な何かではなくて、あなたの聖霊の火が燃えて、我々の肉なるものを焼きつくし、本当にあなたの純なる御霊の火をもつて、我々一人ひとりを全き姿へとあなたが変貌なさしめて下さいますように希い奉ります。

「我、エホバを大いに喜び、我が魂は神を喜びとす、楽しみとす」

とありました。主様！ あなたが我らを喜んで下さり、我々を楽しみとして下さったからでございます。

「初めに言ありき。初めに御業ありき」

と。主様、本当に初めにあなたの御愛があり、愛の御業があり、我々をあなたが新しく造り出して下さったからこそ、私たちの今日があります。主様！ いつも原点に立ち返らせして下さい。初めの愛に立ち返り、主を喜び、主の生命を宝として、我々を互いに祈り合

い助け合つて、進み行かしめて下さい。

どうか、信州キリスト召団、四国キリスト召団、裾野キリスト召団、そして、大阪、奈良、鹿児島各地の召団を覚え、本当にどの召団にも御霊の火の人をどうぞ、絶やす事なく、各召団が燃えて進んで行くことができますように。

主イエス・キリスト様！ 今日集うことのできなかつた兄弟姉妹達をそれぞれの処で覚えて下さい。また、祈りを共にして下さることを信じ、感謝申し上げます。この祈り、主イエス・キリストの聖名にあつて御前に御捧げいたします。アーメン。

